

るにめづらしき寺號山號なり、それ三界唯一心、心外無別法にして心の外に法なし、いかなるをかこれ、別法山心外寺といふかたとづぬれば、一休取りあへず答へて曰く、それ柳の枝に雪折れなし、いかなるかこれ雪折と問ひたまへば、かの侍大いに感心し、さてもさもて、答話にかしこき坊主かな、我等は内々たくみてさへ、さしあたれば失念することあり、又はかりて出でざること多し、即時にかやうの返答せられしこと、あつばれの御坊かなとぞ感じける、

七八 人たる人、人たらぬ人

ある人一休に問ふて曰く、世の中の人の申すことにては、人の人たるといふことは、いかなることを申しはものによ、うけたまはりたく存じし、一休こたへて曰く、されば、この坊主もしらず、足らん

身にてはゆゑ、いはんや人の人たることを知るべきや、去りながら若き人のこゝろざしありて、やさしくもたづねたまふを知らぬと云ふもいなものにては、むかし物知りたる人のはなしを、ちと聞きはつりおきしほどに、申して見ははん、まづ人に人たる人と、又人たらぬ人とひがゆゑに、人たる人を、人と申すげに、たとへば、鷹などの鳥をよく取るは、鷹の鷹たるにては、鳥を得とらずして、鼠などをとるは、鷹の鷹たるにて、鷹とは云ひがたくし、猫の鼠をよく取るは、ねこのねこたるにては、もし又鼠をば得とらずして、看などを盗みくらひは、猫のねづみたるにては、ねこの猫たるとは云ひがたくし、人の人たるとは、人の道を知りたるものを申すげにいと教へられたり、

七九 請賣り

ある人一体に問ふて曰く、學問にうけ賣りと申すことのみ、いかなる事を申すにや、うけたまはりたくい、一体こたへて曰く、さればこれもしかとは知らざることながら、申して見いはん、まづうけ賣りと申すは、あるひは四條五條の辻にて小間物店とて、棚一つに、いろ／＼さまざまの物をとりあつめおき、人の用次第に、賣るものには、このものに、一いろにてもあつらへて見たまへ、何れにても我が職にあらずして、みな上手の仕おきたるを請けうりいたしひあひだ、御用ならば、その人にあつらへて參らせんといふが如く、學問にもうけ賣りの人こそ多くいへ、あつらへて行はん人は、まれにこそいはめ、殊に老子、莊子、諸子百家のさたまでも、とりまじへ

て評論し、物知りと稱ふるは、みな小間物店に似てこそい、買手のためには、用こそ立つこともやあらん、賣手はさせる商人にてもいはい、一言一句にても、我がものにして守り行ふ人は、はるかにすぐれてありがたかるべしと申さるゝとき、この人つく／＼とき、居て、さても理わりかなとて、あつと感じけるとなん、

八〇 珍寶

ある時、出入の下男こゝろに思ひけるには、この寺の一体さまをば今での知識者として、みな／＼たづねて見えるが、問答とやらんをきくに、何んでもない事云ふて、おじぎしてかへらるゝ、我等も和尚と問答して見んと不斗おもひついて、和尚さまにおたづね申します男と申すものは、生れ出るより、珍寶と申すものをもつて出ますが

それを成人しておとす人は、これいかんと申しければ、いまだ言葉もひかぬに、金玉といへども、くろきが如し、

兩眼の、あきらかなるを、持ちながら、

女にあへば、目なしとぞなる、

女房は、辨財天と、うつくしい、

美人といふも、皮のことなり、

八一 ちんちくりん

江州の、竹林寺といふ寺あり、この住寺うまれつき春ひく、して、三尺ばかりなりけるが、去る方に思ひ入りたる美少年ありしを、ひそかにかたらし、折々寺へよびよせ、ねんごろせられしが、何とかして打ちたへ、久しく來らざれば、この住持大いに氣をくさらかし

何事もうち捨て、寢間にうちふしけるに、下人少しの不調法ありしを、腹たちまぎれに枕をなげうち、散々に悪口しけるところへ一休もとより竹林寺とは親しければ、はからず來たりてこの体を見られ、これは何事を立腹したまふぞ、まづ堪忍めされよ、何とばしいたされしやと申されければ、住持ひそかにかたりて、かやうの子細ありて、このごろはうちたへてまゐらず、何とぞしてよびたくいが、親兄弟の前を忍ぶよしうけたまはりけるが、何んぞそれとなきかこつけして、うちたへて來らざるは、如何なることぞと問ひやりたくい、御坊には才覺人なれば、よろしくたのむといふに一休うちわらひ、それは何より易きことなり、このごろ澤山にある菜と、錢と小糠とをすこしづ、紙につゝみてやりたまへといへば、竹林寺はそれをきいて、それはいかなることぞ、その心をきいたし

と云ふに、一休申さるゝやう、なせにこぬかといふことなりと、竹林寺きゝて、一段おもしろくい、さらば明日は、これをもたせやるべし、今日は雨中にて猶さら心さびし、幸ひ阪本より珍酒をもらひたり、一休まゐられよ、我もたべ申さんとて、たがひにさしつさゝれつ、酒宴なかばに、一休たつておどられけるが、その唱歌に、

君がこぬとてまくらが知ろか、枕ななげぞとがはなし、ちくりん
くちんちくりん、さなちくりんじやほごに、きのそんよな、お
どりはなんよさで、ちやせんやころさ、
とうたひかなで、かへられけり、おかしかりしことゝもなり、

八二 くせがつく

一休京都におはせし頃、その近所に人にすぐれてしはきものありけるが、一休へ毎度御無心をのみ申しあげけり、ある時一休かの有欲の僧へ茶臼を借りにつかはされけるが、かの僧返事申しあげけるは、茶臼の儀、お申しこしなされい、やすきほどのおんことにいへども、他所にかしやしいへば、くせがつきやしいあひだ、此方へひきに遣はさるべくいとのことなりしかば、その分にて止みたまひぬ程経てかの有欲の僧、一休のお寺へ、のぼりはしごをかりにつかはしける、一休きこしめして、おへんじありしこそおかしけれ、おやすきことにて候へども、よそへかせばくせがわるくなりいほどに、此方へおこしありて、のぼりたまへといふてやられしと云ふ、おもしろき御返事なりといふべし、

八三 ひえの山路をひろひゆく

一休比叡山へ登りたまふとき、蜷川新左衛門といふもの、お供申されける、折りからのお山へかゝりし頃、和尚さまへ申しあげたき句ふと浮みいあひだ、申して見候はん、おつけ下されよとて、ひえの山路を、ひろひゆくかな、といひもはてぬに、

さしとけて、麓に四貫の、錢をばらり、とつけたまふ、かくいち早き御頓作にてありけるぞ、それより山のぼりて、さまざまの詩歌ありし、

一文や、二もんは何と、思ふなよ、
阿彌陀も錢で、光る世の中、
蜷川

八四 大食家の戒め

金持を、十人よせて、ながむれば、
中に五人は、無學文盲、

あるとき、特の外大ふうをいふ男ありけるが、一休和尚の御相伴の非時をたまはりける時、和尚の仰せけるは、さても其方は、珍らしき大食かなとのたまひければ、かの男、いや、これはたぶると申すほどにてはなく候、それがしが若き友どちより合ひ、かけろくいたしたるとき、餅米一斗つかせ、我等ひとりにて食すれども、いまだ食ひたらざりければ、あたりに粟餅したゝかありけるゆゑ、それを残らず食ひつくしたるに、あまりに腹ふくれたるにより、河邊にはしりゆき、大なる舟あるを見るより、その舟をよこにもちて、川水

をせきとめ申したりと、首ふりてかたりければ、一休きこしめし、
 さても夥々しき大食かな、それほどの大食は珍らしく、去りながら
 愚僧が存じたる山伏ありしが、これも大食人にて、かけ祿して餅米
 二斗をつかせて、それを一人して残らずくらひ、あまりに腹ふくれ
 けるにや、廣き松原にはしり出で、三かへばかりの松の木を捻ぢ
 折りてこしをかけ、休みけるところへ、小さき蛇の、大なる蛙を
 のみ、くるしげに見えしが出できたり、かたはらの見なれざる艸を
 喰ひけるに、ちみくと腹へりたり、山伏これを見て、てよき事
 を見つけたる物かなと、くだんの草をとりて喰ひけるが、運のつき
 たるにや、このくさ人の消ゆる草にて、山伏は忽ちきえて、二斗の
 餅と、ときん、すいかけ、ほら貝、金剛杖など、餅にもたれたると
 かたりたまへば、彼の男顔色をかへて耻入り、早々かへりて、その

後二たびまゐらざりけるとかや、總じて狂がる空言はいはざるもの
 なり、かの男の大ふうを戒しめたまふ處なり、

八五 浪士の窮難を救ふ

しばらく甲斐の國に御逗留のうちに、一人の浪人お出入申しける、
 一休はいきばとけにたまはせば、たのみ奉つりて身上ありつきた
 しと、内々思ひけれども、折をえずして得申さで過ぎけるところに
 ある時特の外御きげんよく、御酒などまゐりけるついでに、浪人申
 しあげけるは、それがし一門歴々方々にまかりあれども、尾羽うち
 からしぬれば、耻かしくてまゐり得ず、且は路銀のよすがもなく、
 不自由にて迷惑申す身にて候、あはれ和尚さまのおかげにて、身代
 にありつき申したきよし、ひたすら頼みあげければ、和尚うちうな

づきのたまひけるは、其方藝能は何を得たるや、浪人こたへて、萬事不調法にて候と申しあぐる、いや、れきくの果とあれば、禮樂、射御、書數のうち、一々ゆび折り立て、問ひたまへども、一つとして存せぬよし申しあげれば、さては、浪人したるも道理とにかくしく、しばらく思案したまひけるが、かの浪人申すには、外に存じたることなく候へども、故ありて敦盛の舞一番存じて候といふに、一休きこしめして、それこそ日本一の事よとのたまひ、しみくと内談あそばして、不便がりするものをかたらひ、その外鼓打ちなどをよびあつめ、天晴云ひ合せあり、芝居にまゝを打ち、こ

一 この度上方より、幸若まかり下り、勸進能仕つり、勸進元者、日本老和尚一休、

とあそばされしかば、侍はいふに及ばず、町人百姓、五里七里をいとはす、貴賤群集して、さも廣き芝居に、小屋も破るゝほどに見えたるどころへ、かの浪人装束つけ、氣だかく身つくろひして、舞臺に出で、あつもりを一番舞すまして、樂屋に入るとひとしく、一人の男出で、まことに御歴々さま、御入御見物のだん、ありがたきなど、いんぎんに一禮をのべ、さてこのつぎには、何をかまはせ申さん、おこのみ次第と申しければ、多勢の見物口々に、大職冠よ、いや高だちよ、清しげよなど、思ひくりに云ひはやしけるところへ、かねていひ合せありけん、五七人のあぶれものども、こゝかしこよりおどり出で、いや、外の舞は見たくなし、あつもりを舞せよといふ、ふれたる男、同じ舞はおたいくつに候はんといへば、かのあぶれもの共、いや、我々がすきじや、敦盛をまはさずんば、芝

居をふみくだかん、いや掴みひしがんなど、いふほどに、又あつも
 りをまはしけるが、舞はて、又前の男出で、口上をふれければ、又
 あぶれもの出で、いや敦盛といふまゝに、ついで四五番まはせけ
 る、その後はまづ今日はおひとまごひとて追出し、木戸口にて、明
 日はとりかへ御らんに入ると評判をふれければ、前の日よりも人は
 多く入りぬ、おさだまりのあつもり一ばん舞はし、次はといへば、
 又前日の如く、かねて仕くみたることなれば、幾へんにてもあつも
 りにて、七日までこそは仕たりける、彼の浪人たよりを得て、一廉
 の身上となりけるとかや、所の地頭の耳にもはいりぬれども、一休
 のことなればとて、お叱りもなかりけるとなり、

八六 粥の字の由来

一休和尚御養生のためとて、常に粥をまゐりけるところへ、長谷川
 興吉とて、小ざかしき男まゐりあはせて御相伴いたし、さて一和
 尚さまへ、このかゆにつきて、お尋ね申しあげたきは、このかゆと
 申す文字は、兩わきに弓をかき、中に米といふ文字をかくには、仔
 細こそ候はめ、我等ふしん至極にぞんじ候、そもかゆと申すものは
 水の中へ米を入れ、しるく軟かに焚きたるを、かゆと申すなれば、
 さんずるに米とか、あるひは食篇に湯なぞこそ書くべきものにて侍
 るに、いかなる仔細にて、かやうにかき申すやらんと尋ねければ、
 和尚こたへてのたまはく、この字は仔細こそあれ、むかし大唐に、
 神農、伏羲とて、聖王おはしけり、そのころまでは、いまだ文字定
 まらず、米食などの文字はあれども、粥といふ字なかりしを、伏羲
 神農、その外あまた聖賢たちをあつめて、米を水の中へ入れ、しく

る軟かに煮てもちゐれば、腹中とのひて、消しやすきものなれども、この文字いまださだまらず、いかいに造るべきやとありけれども、いづれも頭をかたぶけ、さまざまと思案したまへども、思ひ出したまはねば、案じわづらひて、まづ／＼かゆをたきて、人々にすゝめたまひけり、されども誰あつて、思ひ出したまはざれば、神農うつはものゝ上に、箸をからりとおかせたまへば、ゆみのやうに見えたり、さてこそ雨わきに弓をかきて、中に米をかくなりとこたへたまふ、與吉手を拍つて申しけるは、あつばれ御頓作にてまします、いかさま故なき事にてはひまじ、何をおたづね申しあげても、埒あけたまふおん事として、呵々と笑ひけり、

八七 笑の字の由來

長谷川與吉は又、このおかしきにつけて、又不審こそいへ、只今の如く、わらふといふ字を、竹冠に犬とかくこそ、心得申さず、わらふといふ文字、口篇にひろがるとか、目篇に皺など、こそかくべき物にて侍らめ、竹冠に犬といふ字は、いかなる仔細にて書き申ししぞとたづねければ、一休きこしめして仰せけるは、これもかゆと一度に作られたり、笑といふ字をたくまんとて、あまた聖賢ならび居たまふところへ、小さき犬かしらに籠をかぶりておどけ狂ひければ人々一度にどつとわらひたまふ、そのゆるにこそ右の通りにかくなりとのたまひけり、いかさまいはれを承はれば、おもしろきおん事かなと、感じてやまざりしといふ、

八八 金の字の由來

一休和尚は與吉の感心せる状を見すまし、重ねてのたまふやう、總
体文字といふものは、一々よく理をせめたるものにてござる、日用
にみなく書かねばならぬ金といふ文字は、中にもよく作りたる文
字にて、觀音經の中にも、金銀瑠璃磲磔など、七つの寶をいひな
らべし、第一番に金銀といふてある、その金銀なれども、持つべき
人をもたねば、寶とはならぬ、依つて人といふ字の下に、主といふ
字をかきて、金といふ字によます、何とようしたものではないかと
仰せければ、成程とはいひながら、この男も何がなどんをつきたく
おもひて、和尚さま、御尤もの仰せながら、草行でかくときは、い
かにも人の主にいへども、眞字でかきますと、主といふ字とは、少
しちがふやうに存じますが、いかいと申しければ、されば、その不
審はなくて叶はぬところ、そこが第一のころのつけどころよ、一

日もなくてはならぬ大切の金なれども、死んでは(眞ではのころ)
身につかず、入らぬものよと仰せられければ、さてもく、淺はか
なるおたづねを申しあげ、一生の寶を得たることよとよろこびてこ
そかへりけれ、

八九 馬じやげな

ある御大名の家中に、片岡彌太夫といふ浪人が宅に、一休ましまし
けるを、この所の地頭き、つけて、使者をもつて申し上げけるは、
長の旅に、おつかれなさるべく、見ぐるしくいへども、私宅へも御
入來ありて、御うさを晴したまへかしと申しつかはしければ、和尚
よくこそおまねぎ忝けなしとて、使者と共に地頭の宅へきたりたま
へば、地頭も本意にや思ひけん、さまざま御ちそう申しあげて、さ

て、何にても御手跡をくだされたしと乞ひければ、一休やすきことなり、旅館へかへりて、認め進すべしと約束し、程なく彌大夫が方へかへりたまふに、引きつゞきて使者きたり、先きほど御契約申したる御手跡、このものへ下さるべしといひきたれば、和尚もあまりせはしくや覺しけん、彌大夫が書きさしたる文のありしを、使者にわたしたまふ、使者よろこび、持ちかへりて主人にわたしける、則ちひらき見れば、見知りたる彌大夫が手跡なり、これはふしぎなることかな、使のあやまりにてこそあるらめと、使のものをたづぬれば直々御手よりたまはりしといふに、さてはあまりにいそぎて申したるゆゑ、お取りちがひありしものにやと、又も使をもつて、最前下されしは、彌大夫が手跡と見え申し、ねがはくは御自身にかゝせたまふこそ望みにはいへと、申しつかはしければ、和尚うなづき

左ほどに深くお望みならば、いかでおしめ申すべきと、したゝかに包みたる袋をこそわたされける、使者もちかへりて、主人にわたせば、やがて袋をひらき見るに、さもよごれたる、ふるき下帯にぞありけるが、地頭どのも手をうちてわらひける、その後又もお入りの折りふし、柳とばかりの大文字にて、一字かきておくりたまひぬ、又ふるき屏風に、何ともかたちの知れぬ繪ありけり、亭主にとひたまへば、あまり古くなりて見分け申さず、私親どもが申しつるには馬とか、牛とかのやうに御座候よし申さるれば、和尚牛ならば角あるべし、角なければ、馬なるべきぞとのたまふ、亭主申されけるには、お筆のついでに、この繪にも賛をあそばし下されよと申されければ、易きことゝのたまひて、大文字にて、馬じやげなとぞあそばしける、その繪今にありて、いともめでたく、お藏におさまりて、

寶物のその一ツとぞなりたるをぞ、

九〇 見ざる聞ざる言ざるの因縁

ある寺の門の破風に、猿を三ツ作りつけたり、一つは、兩手をもつて眼をふさぎ、一ツの猿は、兩手にて耳をふさぐ、今一ツは、口をふさぐものなりけり、ある時三人づれにてこの門前にたちどまり、これを見物する人々ありし、折りふし一休其所を通りたまひて、立ちよりてこれを見られ、うちうなづき、笑ひて過ぎゆきたまふ、三人のうちひとり申すやう、いづれも三つの猿の理由をさまぐ、難じけれども、遂に合點ゆかず、只今これにしばらくありて、ゆきたまふところの出家の、うちうなづきて通られしは、定めて合點したまふての上のことならぬ、いざ仔細をたづねみると、一休のあとを

追ひ、その袖をひかへ、御坊に物たづね申さん、只今門前にありつる猿を御覽ありて、うちうなづきてわらひたまふは、定めて御僧は御存じありつるものと存する、かやうに申す我々は、愚痴文盲にして、何のわきまへもなきものどもなり、ねがはくは子細をかたりきかせたまへや、宿へのかへりばなしにかまつらん、いかに〜と問ひければ、一休さればこそ、その猿のいはれは我等もくはしくは存せず、去りながら、いづれも歴々の若き衆のたづねたまふに知らぬといふもいかくいひしこともあるげに候、

何事も、見ざる言はざる、きかざるは、

たゞほとけにも、まさるなりけり、

とよみ聞かせたまへば、三人のものども、さて〜、尤もなるお歌のこゝろかな、これは面々のこゝろえになくて叶はざる歌なり、さ

て今の御坊は、佛神の現化なるべしと、みな一同に感じて立ちかへりしが、一人の申すやう、いかに面々、このうたの心をもつて、三人ともに今日よりして、見ざる、聞かざる言はざるの願を立つべし
 みな尤もと同じて、さてかたはらにたちよりければ、折りふし遠寺の晩鐘かすかに聞えけるを、聞かざるのねがひ立てたる人、何とな
 くおもひ出で、

今日の日も、いのちの内に、暮にけり、

あやもやきかん、入相のかね、

と、ふるさ歌をうそふきけるところに、言はざるのねがひ立てたる人の言ひけるは、いかに其方、聞かざるの願のむなしくなりぬるところのあさましさよと、手をうちゆびをさしてわらひあげけるところへ、見ざるの願を立てたる人のいへるは、さてく、かたぐは、

何をき、何を言ひて、共に大願をやぶりたまふぞや、おろかにあさましきことかなと、咎めらるゝ三人のこゝろおかし、

九一 へちまの皮をおくる

一休しばらく赤坂に御逗留ありけるうちに、報念寺といふ浄土寺におやどなされける、住持おろかもなく御馳走申しければ、一休も御満足にやおぼしめしけん、御上京の後までも、おふみなどつかはされける、ある時、報念寺一休へ飛脚をもつて申しあげけるは、今度愚僧の一旦那、立身いたしゆにつき、音信つかまつるべきにいへども、御存じの通り、田舎にてよろづ不自由にしてとゝのひかねい、何にても御身はからひにて、心やすくして見ばよく、かさだかなる物を、おとゝのへたのみ申しあぐるよしにて、わざく飛脚をのぼ

しけり、一休きこしめして、憎き出家のこゝろかなとのたまひて、へちまの皮といふものを、荷物三行李につくらせたまひて、お文をそへられける、遠くのところ、おぼしめしより申しのぼしたまふゆゑ、随分下直にて、かさだかなるものを下し申し、氣に入りはし、如何ほども進じ申すべし、かさねて申しのぼしたまへとあそばし、つかはされければ、かさねては、慮外を申しあげざりけるとかや、

九二 子は寶なり

一休のお寺へ、常々おん心易くまわりける百姓の、元より家貧しきうへに、子多くもちて、その日も過しがたき程のものにてありけるが、和尚のもとへまわり、さてく、私どもはいかなる因果にては

みや、御存じの如く、子どもは追ひく出来まして、當年二歳になるを下として、都合十二人まで出来まして、その中には、とし子どもござります、私夫婦のものは、日に三度の飯さへ腹に足るほど下されたこともなく、これがまことの子の地獄へおちたと申すものかと存じますれど、それならば、どの子が憎いと申すものござりませぬ又かやうの貧家へ生れくる子供も、不合せかとおもへば、いよいよ不便にも存じます、これも前生のむくいにてみや、おきかせ下されよと云ひければ、和尚うちうなづき、尤々、さりながら下の子はいまだニツとおいやれば、まだくいくたり生まるやらしれぬ、かならず夫婦のものゝ氣のつかぬやうにして、あるときにはひとつ處へより、寢酒でものもので、氣をはらし、仕込んでは出かしくするがよいと仰せければ、びつくりして、和尚さま、このうへ出来まし

たら、夫婦のものは何となりませうと申しければ、されば、それについてはなしがある、むかし奈良の都のころ、白木の長者とて、日本に誰知らぬものもなき、大百姓があつたけが、そのとなり、丁度そなたのやうな貧家に、種腹ひとつにて、十八人の子をもつて、今そなたの申さるゝ通り、親ふたりは正月元日より、大晦日まで、食の足るをしらず、隣りの大百姓のことをうらやみ居けるが、ある時夏炎天に、大勢をあつめ、麥をふみ、かこひのうちは元より、門外までにも干しひろげたるに、貧者はその麥を見るにつけても、この干したる麥むしろ、十八枚だけあるならば、子供に一枚づゝ當てわからなば、我等夫婦がこの苦しきも、あるまじきと思ふ事をもしらす、子供等はあしにまかせてあそびあるきて。目のとゞく所には一人も居ぬことよと思ふ折りから、にはかに空かき曇り、大雷なり

はためき、大夕だちふりきたり、大道たちまち大河のごとくなりてくだんの干たる麥、なか／＼取り入るべき間もなく、残らすながしたるが、となりの夫婦は門口に出で、いかゞはせんと思ふところへ、あちらこちらより、走りかへりけるゆゑ、頭の員をかぞへ見れば、一人も不足なく、あまつさへ格別身をもぬらさゞりける、依りて昔より、子供は寶ちやといふほどに、出かしやれ／＼、その長者といへるは、大和國十市郡、天の香具山の東北に、すこし高き岡山を長者やしきといひ、又そのわきに、白木塚とも、箸塚ともいへる塚あり、これはその時の長者主人は、元より家内出入のまで、一飯ごとに、そのはしを捨て、ふたゝびもちひざれば、その捨てたる箸、自然と山となりしとて、箸塚といひて今にあり、又佛説の中にも鬼子母神といへるは、三千人の子をもちたまふも、そのうち一

人をかくされ、夜叉となりたまふといへることもありとて、うたよみてたまりけり、

親となり、子となりくるも、今ならず、

二世も三世も、つきぬ契りぞ、

かすもなき、子を賣る人も、ありときく、

親ではなうて、鬼の再來、

親は過去、わが身は現世、子は未來、

後生大事と、子をば育てよ、

九三 瓢箪の曲遊

一休和尚御手まへ拂底の時分にてありけん、一條もどりばしの辻に高札を立てられける、

一 この度日本老和尚一休、三明六通を得て、瓢箪をひつくりかへす、望みの方々見物あるべきものなり、
今月今日よりはじめ申し、

とあそばされて、紫野に芝居をかまへ給ひけることゝて、言ひはやしければ、京わらんべ、老若男女、貴賤貧福をわかず、足を空になして群集をなし、芝居もすみぬれば、さらば時分はよしとて、一休御用意あり、御衣のまへに、大なる瓢箪をぶらり／＼とつけたまひ、兩手にばちをもちて、西より東、ひんがしより北、北より南と飛びめぐりはねかへりなれど、いくたびもなしたまひ、大音をあげたんへう／＼とて、二十べんばかり踊まはり、はねりなどしたまひて、その後樂屋へはしり入り、御自身に太鼓をうちたまひ、これがかはり／＼とて、残らず追ひ出したまふ、見物のものども、こ

れはいかなることぞとて、狂がるもあり、あるひは今にはじめぬ和尚のおどけかなと、しばらくは口も得ふさがらぬものも多かりけるとかや、

九四 地獄極樂

一休甲斐の國にしばらく御逗留のうちに、地獄などいへる高山あり古跡も又多ければ、一見のために立ちいでたまひけるを、所の地頭かねて答話よきことをきき、直ちにきかまほしく、わづかの供まはりにて、しらの体にて近く行きむかひ、それなる法師よ、地獄極樂はいかにと問ひければ、一休まなこに角をたて、糞をくらへとのたまひければ、地頭もつての外に腹をたて、にくき坊主の悪口かなものないはせぞ、いましめよと下知すれば、かしこまつて若黨共走

りよつてさんぐに打ちする、高手小手にいましめければ、一休自若として地頭にむかひ、これこそ地獄よとのたまへば、地頭心づきあはて、馬より飛び下り、手づから一休のいましめをときて、さても、ありがたき御教化かなと禮拜し、則ちわが乗りたる馬に一休をのせまらせ、私宅へともなひかへり、さまぐの珍味をそなへ、朝夕そばをはなれず、馳走いたさるれば、一休これこそまことの極樂なりとのたまひけるとかや、

九五 春へ

一休旦那衆二三人同心して、東山邊へ遊山に出でたまふ、ときしも春の中ばにて、梢の花最中なりしかば、こゝかしこに、遊山の人々おほし、さるかたはらに、五七人うちより、手をうちたゝきおどり

あがりておわらひしてあそぶ、何事か、おもしろかりけるときくこゝろに、屁をひりておもしろがる、旦那のうち一人の申すやう、あまり酒にてうじ、何がそれほど屁がおもしろかるべきとわらへば、一休申さるゝは、いや、おもしろきこそことわりなり、よくく昔より、おもしろきことなればこそ、謠にも、おもしろのはるべや、あらおもしろの春べやと、うたふほどに、さては春のへはおもしろきも道理と申されき。

九六 桂川の失策

ある時、一休かつら川をわたりたまふに、何とかしけん、川中に倒れて流れたまふに、折りふし川には人多くあつまり居て、これはと言ひながら、誰ひとり取りあげんといふものなかりしか

ば、一町ばかりながれて、さいはひ川杭にかゝり、やうくあがりたまひしかば、人々よりつとゐ、さてく、御坊は運つよき人かな何としてあがられけるやと言ひしかば、一休うちわらひ、されば、我川へはまりたればこそ、あがりたり、あがりたればこそ、生きたれ、さまでめづらしきことにはあらざりけりと申さるれば、人々きゝて、さてく、口がしこき坊主かなと、どつとわらひてうち過ぎぬ、今もむかしも、人情にはかはりなしと見へたり、

九七 眞直に見る

一休和尚能州蜷川村の草庵にましませしころ、泉水のきしに、水の上におよんで、横ばひにねたる松のありける、弟子衆をあつめて、この松を、眞直に見るものやあるとたづねたまふ、みなく立ちか

はり、入りかはり見られけれども、横ばひの松は、どこまでも横ばひなり、そのとき鱧川新左衛門まわりあはせて、我等いかにも真直に見ていと申されければ、さては、いかにと仰せあれば、まことにいがみてこそいと申されける、和尚手をうつてよく見られたりとて、五十則を許すと仰せられける、

九八 天文博士

洛陽に、天文博士なにがしといふものあり、あるとき、一休のいほりへ行きけり、和尚出であひたまひ、そなたは久々見えざるが、いづかたへ参られたるぞと仰せらる、なにがし申すやう、されば、私はこのごろ、去る人にたのまれ、南都にまかりあり、二三日まへに登り申し、和尚曰く、何んぞめづらしきこともなくみや、博士こ

たへて曰く、されば、奈良にてめづらしきとをうけたまはり、それはいかやうなることにてありけるぞといへば、博士曰ふ、般若坂のほとりに、齒をぬくものあり、一つを二文づゝにて取るときは、去るもの、虫齒くひをもちて、時ならずいたむときには、身体さへたへがたきとでもだへけるもの、かれがことをき、および、齒をぬきに行く、一ツを二文づゝなりと申す、このもの言ひけるは、それがしはき、及び、遠方よりまゐりたり、一文にまけてぬかれよといへば、いや、少しもそらねはなく、御用ならば、何時なりとも、おこしあれと云ひてまけず、色々ことはりを言ひつくし、詮方なくかへるべきと思ひしかども、切角この事に参りて、むなしくかへるべきにあらずとやおもひけん、是非、まけなくば、二ツを三文にてぬかれよといふ、先方の云ふやう、さて、其方はこまか

く直切りたまふ人かな、まけておましやれとて、二ツを三文にてぬきとりけり、この男かしこくも直ぎりてぬきたりとおもひ、大きき自慢がほしてかへりしを、あたりのもの共申すやう、さてさて、たゞ今の男は、せんないことをしけるものかな、そのぬくべき歯ばかりをぬかすして、ぬくまじき歯までもぬくは、一文の錢をおしみてぬかでも苦しからざる歯をぬく、さりとは世にめづらしき笑ひもの、これは小利大損ともいふべきかとわらひける、かやうのめづらしきことをきいて、かへりましたとはなしける、和尚おかしくおぼしめし、ころくとわらひ、まことにそれはおもしろき話なり、されば世間の人、利やうにこゝろ深きは、事にふいて、利分をおもふほどに、因果の道理もしらず、當來の苦限をもわきまへざるが如くなど、四方山のはなしおはりて、和尚西の方の遣戸をあけて出

でらるゝ、
博士見て、やがてかく言ひける、
いかばかり、西に朝日の、いづるかな、
一休やがてこゝろ得たりと、
天文はかせ、いかゞ見るらん、
といひたまへば、博士手をうちて大いにわらひ、いとまも乞はでかへりける、

九九 男色にふける

一休和尚は衆道すきにましゝて、兒、かつじきへの艶書、こゝかしこにありといへり、されど御心の動きたまはざるときは、これを忘れたまふ如かりしと云ふ、駿河の府中に、小玉辨之助とて、鄙に

似げなき美童ありけるが、和尚ふかく口説たまへども、したかはざりければ、狂歌をおくりたまへける、

花は根に、鳥はふるすに、かへれども、

人はわかきに、かへることなし、

とばかりにて、小辨どのまゐる、都がたのづくにふとかきてつかはされければ、御歌のこゝろにや耻ぢけん、しみくと御返事申しあげて、すなはちその夜まゐりて、おのぞみに随ひ申さんと申しあげければ、和尚うなづき、よくこそ来りたり、今朝までは、さこそ思ひしが、今はもはや用事もなしとて、かへしたまひけるとかや、

100 善悪をなすみなもこ

七條のほとりに、有徳なる町人あり、あるとき、佛事供養のため、

諸出家は申すに及ばず、乞食までもかくのごとく慈悲をしけり、あるとき一休に申し入れ、しゆく不審どもたづね、ついでに問ふて曰く、いづれをさして善とし、いづれをさして悪とするや、和尚こたへて曰く、善悪かぎりなし、たゞ善悪を知らんとならば、そのよしあしを爲すみなもとにあるべし、かれにゆきて尋ねよとこたへたまへば、亭主尤もと感じける、さて和尚たちたまふ折りふし、雨ふりければ、亭主しばらく待つて、雨を止めたまへと申せば、一休申されけるは、

ふらばふれ、降すばふらず、ふらすとも、

ぬれてゆくべき、袖ならばこそ、

と云ひすて、出でたまふ、

叢書
一休禪師百話
終

大正四年五月十日印刷
大正四年五月十五日發行

不許複製

定價
(錢五十二金)

印刷者	三浦幸三郎	神田區東紺屋町四十七番地
發行者	服部喜太郎	京橋區本材木町三丁目二十番地
著作者	河村定靜	京橋區本材木町三丁目二十番地

東京市京橋區本材木町三丁目二十番地

發行所

圖書出版商
求光閣書店

(電話京橋三三三九番振替東京一六〇九番)

340
28

常に如斯良書を必ず座右に備へよ!!!

□本書購讀の諸士は?

北川博愛先生著

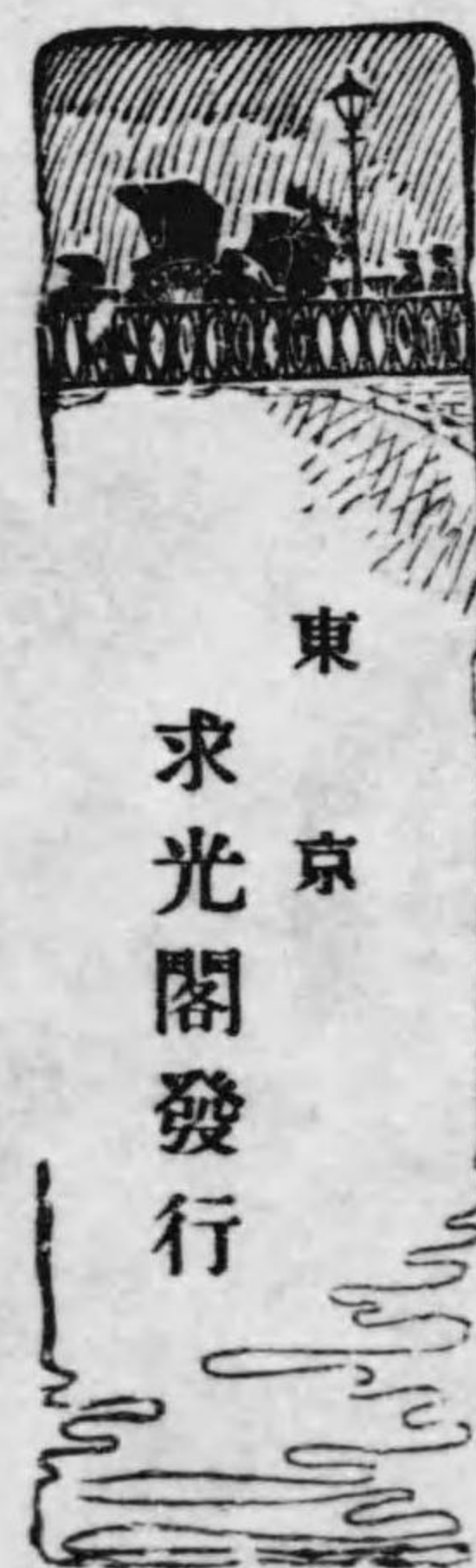
五十嵐雲鶴	鹿島生	北川博愛	加藤貞次郎	大町桂月	同上	青木信一	秋山悟庵
國民精神修養百話	家庭訓孝子と貞女	師範校中學校女學校作文教範	詳法中等書翰文	我がが筆	我がが文章	通俗農家百談	國民精神修養訓話
假菊製判	同上	長形布製	布四六判	假四六判	同上	同上	假菊製判
正稅價八十四錢	正稅價八十四錢	正稅價六十三錢	正稅價六十八錢	正稅價四十五錢	正稅價四十五錢	正稅價八十七錢	正稅價八十四錢

□□文學士物集高量著新日本歴史辭典◎總クロノス美本紙數千頁◎郵稅金拾錢◎定價金壹圓貳拾錢◎特價金九拾錢□□

活きたる三教範
活きたる三教範
高き等作教範

町木材本橋京京東
店書閣光求
九二二二橋京話電
九〇六一東京替紙

製スーロク形長トッケボ
錢六稅郵・錢拾四册各價正



東京
求光閣發行

340
28

終

